

砂川市少年の主張大会

主張全文紹介②

優秀賞「伝統芸能を守るために」

砂川中学校3年 盛川 琴音



みなさんは、三味線を見たり、触ったりしたことがありますか。私は、幼少期から母の影響で三味線と民謡を習っています。三味線というと、歌舞伎や芸子の舞踊で使われている堅いイメージがあると思いますが、最近では、和楽器バンドの「千本桜」という曲で見たことがあるのではないのでしょうか。ただ、私が、お稽古している三味線は、民謡の歌い手の伴奏をするためのものです。

民謡といえば、よさこいソーラン祭りで有名な「ソーラン節」や、北海道の盆踊りで多く使われている「北海盆唄」などがあります。また、私が、ここ数年全道大会に向けて練習している「石狩川流れ節」は、旭川市発祥の歌ですが、私が住んでいる砂川市にも流れている石狩川が、上流の山から湧き出て滝となり、下流へと流れてくる様子を雄大に表現した歌です。

ここでは、紹介しきれませんが、全国各地に歌い継がれている民謡は、歌詞を読むと、先人たちがどのように暮らしてきたかが分かるものが多く、それだけでも興味をひかれ、おもしろいものです。しかし、年々、民謡や三味線、尺八、和太鼓などの演奏をする若者が減ってきているという現状があります。

私に稽古をつけてくださっている先生たちは、次世代に三味線や民謡を継承するために、とても熱心に教えてくださっていますが、若くはありません。さらに、発表会や大会出場者も八割は高齢者で、伝統芸能の危機を肌で感じています。

私が今も三味線や民謡を続けていられるのは、熱心に教えてくださる先生がいっぱいいるからです。しかし、今後、教えてくださる先生方が高齢のため教えられなくなったり、会を解散したりしてしまうと、やめてしまう方も増えてしまいます。どうにかこの伝統芸能を存続させていくためにはどうしたらよいのか…、私にできることは何かないのか…、私一人ではできないことには限界がありますが、何かしたいと考えています。

まず、私は、三味線や民謡をもっと身近な存在にしたいと考えています。そのために必要なことは、私自身が多くの人の前で三味線を演奏したり民謡を歌ったりすること、また、たくさんの人たちに実際に体験してもらうことです。

実際に自分で三味線を弾いてみると、普段の生活では聞くことのない音色が聞こえてきます。その音は、とても穏やかで心が落ち着くような音です。ただ、弾き方やバチの持ち方などを変えて、その時の心情に合わせて弾くこともできます。自分の感情を豊かに表現できることが、三味線の素晴らしさであり、魅力でもあります。

私ができることのもう一つは、自分の実力をさらに高め、多くの人に民謡や三味線の素晴らしさを伝えられるようになることです。

私は、これまでたくさんの民謡の大会に出場してきました。なかでも、一番悔しかった大会があります。それは、上位三位以内に入ると東京で開催される大会に出場できるというものでした。その大会で私は、0.003点差で四位となり、東京行きを逃してしまいました。当時の私は、とても悔しい思いをしていましたが、今となっては良い経験だと思っています。この経験のおかげで、今も粘り強く頑張ることができているからです。この先も私は三味線や民謡を続け、もっともっと実力をつけていきたいです。さらに、伝統芸能を後世に受け継いでいくためにも、新たに三味線以外の楽器にもチャレンジしていきたいと思っています。

だんだんと進化していく日本の中で、デバイスに残すだけでなく、直接、形や音にして残すことで、先人たちは私たちに、伝統芸能を現在まで伝えてきてくれました。

今、私にできることは、今後も様々なところで歌い続け、少しでも興味を持ってもらい日本だけでなく、世界中の人たちに日本の伝統芸能の良さを広めることだと思っています。

最後に北海盆唄の一節から『歌え踊ろよ、ただけよ、太鼓よ、月のナ月の世界にとどくまでヨ』

審査員の講評

日本の伝統芸能について、私たち日本人は身近に触れる機会が少なくなっており、そのことが、伝統文化の伝承における大きな課題の一つになっています。発表から、自分自身が演奏している三味線について、稽古に励み、様々な機会で多くの人達の前で演奏を続けることを通して、三味線の魅力を伝え、伝統を継承し、守り通そうとする若い三味線奏者の強い意志を感じる発表でした。